
ななつ.....

ことぶきはじめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ななつ
……

【Zコード】

Z2179Z

【作者名】

ひとかみはじめ

【あらすじ】

君島静奈が青井優に語る、学校で起つる怖い話。それをオムニバス形式で掲載していきます。

プロローグ（前書き）

怖い話が苦手な方は「遠慮ください」。また一部残酷描写などもありますので、いらっしゃる苦手な方は「遠慮ください」。

プロローグ

ななつ……

作・ことぶきはじめ

なぜ彼女に声を掛けたのか。

声を掛けなかつたら、彼女はずつと独りぼっちだつたかもしだ
い……。

私を理解できる人間なんて、この世には存在しないのに、なぜか
彼女は私を理解してくれそうな、そんな気がした。

もしかしたら、彼女は私が捜している人だろうか……。
だから声を掛けた。

おそらく、それが始まり……。

土曜日の正午過ぎの教室に、きみしましづな君島静奈はただ一人、本を読んでいた。

今にも降り出しそうな分厚い雲のヴォールが空全体を覆つていて
ため、昼を過ぎたばかりだといつのにやたらと薄暗く、静奈のいる
教室も例外ではない。

教室の電気は点灯しているが、それでもこの陰鬱とした雰囲気を
払拭することは出来ずについた。

いつもなら校庭から聞こえる部活動の声も、この天氣のせいか、
開け放たれた窓からは僅かに聞こえてくるだけである。

静奈は湿つた風を頬に受け、フウと嘆息する。それから「まつたく……」と小さく呟いた。

視線を彷徨わせていた文庫本を閉じ、ゆっくりとした動作で窓際まで立ち寄つて、窓を閉める。

本来なら帰宅部である彼女は、すでに下校していてもおかしくはない。けれど、ここ最近の物騒な事件のせいでの彼女の兄である静也が迎えに来る手筈となつていて

静奈の両親の帰宅はいつも遅く、その帰宅の遅い両親の代わりに何かと面倒を見てくれるのが、少し歳の離れた兄の静也だ。

静奈は兄の静也以上にしつかりしている。両親の信頼もある。けれど静也は妹の静奈をいつも心配し、なにかと世話を焼きたがつた。静奈にしてみればそれが少々鬱陶しくもあつたが、ここ最近の通り魔事件を考えれば、やや仕方のないことでもあつた。それに兄の顔を見ないというのも何か寂しいものがある。

それでも、ここまで過保護すぎるのもいかがなものか。とも思つており、兄に向かつてそんな事を言えば、目を三角にして憤慨するかもしれない。

兄には少々シスコンの氣があるのだ。頭の隅でそんな事を考え、閉じた窓枠に手を当てたまま、静奈は頭を振つた。

英語や運動をえらく苦手としてはいるものの、全般的には成績優秀ではある静奈だが、料理は苦手の部類である。そんな静奈に対し朝晩と三食をきちんと準備する静也は、静奈にとっては必要不可欠な存在であつた。

だから下手な事を言つて機嫌を損ねるわけにはいかない。自分の生活環境を悪くしないために、以上のようなことを兄の前では口にしないでおこう、そう心に誓つ。

もつとも、普段から表情の乏しい静奈の心の動向など、無頓着と朴念仁が服を着て歩いているような兄には、決して見破る事など出来ないので……。

クルリと身を翻し、自分の席へ戻ろうとする。その時、どこから

入ったのか分からぬ風に、長く艶やかな静奈の黒髪がふわりと舞上がつた。

またか。そう思い周囲を見渡すが何もない。やや乱れた髪を直して静奈は再び席に着き、読書を再開した。

窓を閉じてしまえば外界の雑音は全て遮断され、静奈の息遣い以外にも音を発するものはない。

正面の黒板の上に掲げられている時計でさえも、静かに時を刻むだけである。ただ静奈の、本を捲る時の音だけが、この教室に存在していた。

十数ページほど読み進めたところで、ふと何かの気配を感じる。本をそのままにして顔を上げ、辺りを警戒する。

静奈の切れ長の目が、教室の片隅にいる人物を捉えた。

静奈は自分が、部屋に何者かが入ってきたのも気付かないくらいに読書に集中していたのだろうか、と小首を傾げる。

ズボラな兄の静也などであれば、十メートル先からでもその存在を感じることが出来るし、他の誰かが部屋に入れてくれれば、静奈にはその気配が分かる自信があった。

だが、教室の隅にいる人物を確認すると、自分が気配を察することが出来なかつたことに納得した。気配をなるべく感じさせないのは、彼女の得意技でもあつたから。

「ようやく気が付いてくれた、君島さん？」

気配を感じさせない得意技とは真逆に、その存在は他者の目を惹いた。

やや明るい色に染めた肩までの髪の毛は、軽くウエーブがかっており、相手を覗き見るような動作をするこの少女にはよく似合っている。

キヨロキヨロとよく動く大きな瞳に、小さな鼻、それに形の良い脣。頬にはソバカスの痕が存在するが、それがこの少女に愛嬌を醸し出していた。

身長は静奈よりもやや高い。その彼女がズカズカと静奈の傍までやってきて、ズイッと身を乗り出して静奈の顔を覗き込んだ。

静奈も負けじと、じつと相手を見つめ返す。もっとも相手からすれば、睨まれている感じがするのだが……。

「何か用かしら?」

青井優。それが彼女の名前だった。

優はおどけて肩を竦めてみせ、それから静奈の前の席の椅子に跨るようにして座り込んだ。

背もたれの部分に肘をつき、右掌に自分の顔を預ける。

「なーんかさあ、こいつ暇でさあ……」

氣怠そうに、そして相手に対しても甘えるような声を出す。

今度はやや下方から静奈の顔を覗き込み、何かを期待するような視線を投げつける。

静奈はそんな優を一瞥すると、文庫本を閉じ、それを鞄に仕舞い込もうとする。

それを見た優が慌てた。

「ちよ、ちよ、ちよっと、なんで帰ろうとするわけよー。それって

「すいぐ失礼じゃない？」

「だったら青井さんも帰ればいいじゃない？」

「土曜日に早く帰ったつてしまつがないじゃない！ 関島さんだつて、暇なんでしょう？」

「ううん。忙しいわ」

「何でそんなにイケズなのよー… 可哀そうなあたしに、ちょーっとぐりい付き合つてくれてもいいじゃない！」

「嫌」

淡々と素っ気なく答える静奈に、優はバタバタと腕を振り回す。構つて欲しいアピールをしているのだが、目の前でそれをやられれば少々鬱陶しい。

両手をバタつかせる優を黙つて一睨みする。その表情は綺麗なだけに迫力がある。優はそんな静奈の視線に耐え切れず、大人しく席に着いた。

その時、静奈の鞄の中から着信メールを報せる音が鳴った。鞄の中を漁る静奈を見ながら、優は椅子に座りなおして背凭れに両腕を預け、そこに顔を乗せる。

「君島さんって、携帯持つてるんだ」

心底意外そつて、携帯を弄る静奈を見つめる。

「まあ、家族以外誰も電話しないけどね」

「ふーん。で、誰から？　彼氏とか？！」

相変わらず人の話を聞かない奴だ。静奈は携帯を弄りながら、頭の隅でそんな事を考える。

その優はまたしても身を乗り出して、静奈の携帯を覗き込もうとする。

静奈はクルリと身体ごと相手に背を向けて、携帯画面を見られないうつにする。

暫くの間無言で力チ力チと携帯を弄り、それから携帯の蓋を閉じると、再びそれを鞄へと戻した。

「ねえねえ、誰からのメール？　やっぱり彼氏とか？」

興味津々、喜色満面といった感じで、静奈に問いかける。静奈は「違うわよ」と静かに相手の言葉を否定する。けれど優は引き下がりそうにはない。

静奈は優がどうやら解放してくれそうにないので、渋々といった感じでメールの内容を話した。

「お兄ちゃんからのメール。迎えに来るのは4時を過ぎたんだって、そつこいつ内容のメール」

「ふーん、そうなんだ。あつ、じゃあ、それまでは暇なんだ！」

優の瞳を見れば、その瞳の中がキラキラと輝いているのが見えた。静奈が黒板の上にかかっている時計を見ると、時計の針は1時20分を指示している。

あと2時間40分。読書をするだけでは間が持ちそうにない。今読んでいる文庫本も、あと一時間もすれば読み終わるだろう。それが少し勿体なく感じられるし、目の前の優を一人にしておくと、こちらの読書の邪魔をしかねない。

「しあわがない」相手に聞こえないくらいに小さな声で呟くと、静奈は優の提案に乗ることにした。

けれど話題を提供できるほど、静奈は流行に敏感な方ではない。どちらかといえば一人でいることを好むし、またその方が気が楽だつたので、あえて他人を自分のテリトリーへ入れることはしなかつた。

自然と興味のあるものは、自分の世界観を構築するものだけとなってしまう。話題がないのはそのためだろう。

けれど静奈はそれでもよかつた。自分を理解してくれる人物など、兄の静也以外存在しない。そんな思いがあるため、静奈はクラスメートとは一定の距離を保つて接している。

だが目の前に存在する青井優は、その距離を乗り越えて静奈と接していた。そういう意味においても、青井優という少女はかなり稀有な存在であった。

それはさておき、何か話題を提供できないものだろうか？ 静奈がそう思った時、向かいに座る優が、きっかけを作ってくれた。

「何か面白い話つてないの？」

優が瞳を輝かせ、静奈に尋ねてきた。

優は静奈が、優が知る限り他の色々な人物よりも沢山の本を読んでいるのを知っていたし、その沢山の中から何か面白い話でも聞きだそうと思つただけかもしれない。

だから特に意識したわけではないだろう。けれどこれは静奈にとってありがたかった。

静奈は先ほどしまつた携帯を思い出し、それからひとつ、皿を開じた。

「じゃあ、学校の不思議な話でもしまじょうか？」

「えっ！ 学校の七不思議？ あの、……トイレの花子さんとかってやつ？」

「それとは違うナビ……」

「なーんだ、違ひのか」

相手の落胆する表情を見て、静奈は薄く笑つ。

「けど、実際にあった話よ。やつこつのは嫌い？」

「怖い系の話？ それはちよつと苦手かも……」

「ふーん。じゃあ、私が読んだ本の話でも聞く？」

「どんなマンガ？ ジャンプ系だつたら大丈夫」

「マンガじゃないわ。デコマ・ファイズの……」

静奈が作品名を言おうとしたといいで、優が待つたをかける。難しそうな表情で右手上差し指を、自分のおでこにあてがつ。その仕草がどこかコミカルで、愛嬌を誘つ。

「やつぱり怖い話にして。難しい話は聞くから……」

「…………」

静奈は、真面目にそいつを優を、マジマジと見つめる。それからコホンとひとつ咳払いをして、深く椅子に座りなおし頭を下げた。

演出だらうか、前髪が邪魔をして、静奈の顔が隠れてしまう。

「じゃあ、開けてはいけないメールの話でもしまじょうか？」

下がった顔から、低く唸るような感じの声が聞こえてくる。

「えつーーーこの学校つて、そんな話があるんだ。私知らなかつたー！」

優は努めて明るく答えた。

「………… そうでしょうね」

またしても低く唸るようにひそつひそつ、静奈の顔がゆっくりと持ち上がり、その表情が露わになる。

優はその顔を見て、背中に悪寒が走るのを感じた。静奈の白い顔は、どこか無機質で、感情といつものが読み取れない。

静奈の瞳が異様なほどに狂気の色を醸し出し、無機質なその表情はどこか能面のような恐怖を感じさせる。

本人には自覚はないだろうが、静奈は美人である。それこそ日本的人形のような美しさがある。

その彼女がこういう表情をすれば、それは十分な迫力と、言い知れぬ恐怖があつた。

優は静奈の発する狂氣の視線から、抗うことが出来なかつた。静奈の白い顔にくつきりと浮かび上がる程に印象的な紅い唇が、ゆっくりと開き、物語を紡ぎ始める。

その声は、暗く沈んだこの教室に、ひとつつの旋律として流れ出していった。

「これは私のお兄ちゃんが学生だつた頃の話なんだけど

」

プロローグ（後書き）

やつくじと連載してこたいたいと思こます。

メール 第壱話（前書き）

月島静奈が語る物語です。

メール 第壱話

ななつ……

メール

第一話

作・「じぶきはじめ

「うちの学校から送られてきたメール。これ絶対に開いたら駄目なんだって」

「えー、なんでえ？」

「死んだ生徒からのメッセージなんだって」

「バツカラしいい」

「その生徒が死んだ時間が19：25で、その時間のメールだけは絶対に見たら駄目なの」

「何で死んだ時間が分かるの？」

「そりやあ、警察が調べるから分かるでしょ」

「アホくせ……」

「…………だよねえ」

その日も両親は遅かった。

神田実は自分の部屋の時計を見る。棚の上に置かれたデジタル時計の数字は23：52だった。

すでに日付も変わらうといつ時刻なのに、両親はまだ帰ってきていない。

それは今に始まつた事ではないし、両親からの束縛を何よりも嫌う年頃の少年にとって、より快適な環境であった。

実はそのささやかな時間を、存分に楽しんでいる。多少の寂しさを紛らわせながら。

学校から帰つてきても、家の中から木霊す声は全くなく、自分の声が不気味に響き渡る。生活音は全くな。家の中に入もいない。誰かに構つて欲しいと思つこともあるが、それは当然のこととなりつつあつた。

そのような理由で実は無言で黙々と、自分で自分の世話をするしかなかつた。洗濯、掃除、食事の準備。学校の勉強以外でも、実際にやることが沢山ある。

当初はそれらが多少煩わしくもあつたが、今では日常の一部となつてしまつてしている。

いくら慣れたとはいえ、それらの雑務から解放されれば、夜の帳の落ちた時間になるのも仕方のないことであつた。

そしてその僅かな自分の時間を、実はパソコンの中で楽しむことになっていた。

パソコン本体の電源を入れ、画面が立ち上がつてくるのを待つ。このパソコンは一年ほど前、たまに早く帰つてきた両親が、実の暇つぶしにと買い与えたものだった。

ノート型のパソコンで、買った当時の値段は10万ぐらいだったような気がする。

かまつてやれない両親の贖罪なのだろうか。どうでもいいことに金をつき込むとは思いつつも、拒否するなどといつ懸かなことはしぬかつた。

画面が立ち上ると、とりあえずネットに繋ぎ、まずは自分宛のメールをチェックする。

サイト運営などをしているわけではないので、メールチェックなどは時々しかしないが、それでも何か変わったものが送られてくる可能性はある。

そして本日送られてきたメールが6通ほどあつたが、ほとんどが広告などのメールであった。

最後のメールを削除しようとして、マウスを動かす指がピタリと止まる。差出人を見れば学校からである。件名には何も書かれていたかった。

怪訝に感じながらも一瞬、そのメールを読まずにそのまま削除してしまおうかと思つ。けれどすぐに思いとどまり、内容を確認した。

わたしを探してください。

とだけ書かれたいだ。

実は日付を確認する。日付は本日であった。次いで時間を確認する。時間は19：25。

不気味さが一瞬、実の全身を駆け抜け抜けていったが、それはすぐに不快感へと変わつていった。

「クラスの奴の悪戯か？」

不快感からか、ついついそんな独り言が口から零れる。

暇なことをする奴もいたものだ。こんな悪戯をしそうなのは……、いくつかクラスメートの顔が実の頭を過つていった。

椅子の背凭れに体重をあずけ、上半身を後方へと逸らしていく。なんとなくサイトを一覧する気分ではなくなった。

「……寝るか」

結局はクラスの誰かの悪戯だろう。なんとなく気が削がれたような気がして腹立たしい。明日学校に行つた時にも問い合わせばいい。上体を逸らし、椅子に座つたまま両手を天井に向かつて突き上げ大きく伸びをして、自分の中に発生した靄を外へと追いやる。

それからフラフラと立ち上がり、部屋の電気を消す。ベッドへと潜り込んでふわあと大きく欠伸をすると、そのまま夢の世界へと旅立つていった。

翌朝。いつ帰ってきたのか、そしていつ出かけたのか分からぬが、とにかく両親はすでに家にはいなかつた。

それを寂しいと思うことはなくなつたが、やはり少しひがい顔を含わせていいような気がする。

簡単な朝食を口に放り込み、朝のテレビを見ながら咀嚼する。それから身だしなみを整え、家を出た。

通学路には燐々と朝の太陽が降り注いでいる。その陽の光を浴びながら、実は学校へと続く道を歩いていく。次第に生徒の姿も多くなっていく。

賑やかになる通学路を傍目に見ながら、昨夜のメールのことを考える。

あれは一体、クラスの誰の仕業だろうか？　ヒ……。

「よおー！」

「おはよう、誠

いきなり声を掛けられた。相手の右腕が実の首を軽く締め上げる。軽く咳き込みながら、そんな事をするいつもの相手を見返した。

田所誠たじいしゆまことは、クルリと相手の正面へ回ると、おどけた風に敬礼した。

「おはよっすー！」

手ぶらのまま、誠はフランフランと実の横を歩きだした。実はそんな誠を横目に見つつ、昨日のこと尋ねる。

「昨日のメール。お前だろ？」

「はあ、メール？ なんのこつちや？」

惚けているのだろうか？

一瞬そんな疑念が実の頭を過るが、誠は嘘を突き通せるほどポーカーフェイスが巧いわけではない。

こいつじゃないのか。そういう悪戯をやりそうな人物であつたが、その彼が違うというのなら違うのだろう。
長年の付き合いからそれぐらいのことは分かる。では他の奴らか？ 漠然とそんな事を考えながら、先を歩く誠の背中を眺める。
長細い誠の顔が、僅かに後ろを振り向いた。

「早く行こうぜ」

フラフラと先を行く誠に声を掛けられ、実はゆうくじと歩きだした。

学校に着き教室へ入る。自分の席に着き、うつ伏せになつた。
昨日のメールの些細な疑惑が小さな棘となり、実の心の中に深く突き刺さる。

それが気になり、他者の雑音を遮断して、うつ伏せのまま自分の考えを纏めようとする。

送られてきたアドレスはこの学校からだつた。時間は19：25。
誰かが学校に侵入し、悪戯したのではないだろうか。
だとしたら何の目的で？ しかも『見つけてください』ってどういうことだ？

「……そりゃ実。幽靈からのメールだよ」

突然声を掛けられたことにビックリして見上げると、そこには誠が居た。相変わらずヘラヘラとしゃつこっている。今はそれがどうも癪に障る。

やつぱりこいつが犯人か？

「へへへ、怖い顔すんなって。それに今、声に出てたぜ」

知らず知らずのうちに声が出てたのか。恥ずかしさを隠すため、誤魔化すようにして頭を搔いた。誠に対しても曖昧な表情をみせる。誠は相変わらず、ヘラヘラと笑っている。どうもこの綿りのない顔が昔から好きではないが、それでも一緒にいるのはなぜだろうか。

「まつ、そのメールだけども、何かの間違いつてこともあるわ。気にすんなって」

誠の言つとおり、やはり考え過ぎだろつか。何となく心に引っかかるものを感じつつ、実はメールの件を忘れることにした。
結局、誰かに問い合わせせず、その日の授業は過ぎていった。

朝からの快晴は夕方過ぎには崩れ始め、実が家に着くころには大粒の雨が降り始めていた。

家に入ると鞄を放り投げ、急いで洗濯物を取り込み、乾燥機にかける。その間に濡れて冷えた体を温めるため、シャワーを浴びた。

シャワーから流れ出る温水に身を委ねつつ、ふと頭の隅に残っていたメールの件を思い出す。

学校では朝以来思い出すことはなかつたが、家に帰つて人心地着けば、妙にそのことが気になつた。

「気にするな」と誠は言つていたが、シャワーを浴びて心に余裕ができたことにより、メールのことが蒸し返される。

あの文面には一体、どういった意味があるのだろうか。『私を見つけてください』と書かれていたが、その“私”とはいつたい誰のことなのだろうか。

シャワーホークから降り注ぐ水滴が床のタイルに叩きつけられ、風呂場に響き渡る。

物思いに耽りながらも全身を洗い終え蛇口を止め、風呂場から出た。足マットで水氣を切り、近くに置いてあるタオルで身体に着いた水滴を拭いとつていった。

手にしたタオルを頭から被る。その奥から「ふう」とため息が漏れ聞こえてきた。

いつもより早い時間に自分のパソコンの前にいるのは稀であるが、それは日常の家事の手を抜いたからという理由がある。

手を抜いたのは、やはりあのメールが気になつたからである。今日もパソコンを立ち上げ、メールをチェックした。

一件のメールが受信ボックスに入っている。宛名はやはり実の通う学校からであつた。

やはりという思いと不気味さを内包しつつ、実は僅かに震える指でマウスをクリックした。

ディスプレイに、届いたメールの内容が表示される。

私を探してください。私は学校にいます。

短い文章ではあるが、昨日よりは幾分内容が踏み込んだものになつていてる。

ゴクリ

実は生睡を飲み込む。カラカラと干乾びていく喉がやけに熱く感じられる。

実はこの不気味なメールの内容に、少し興味を持ち始めていた。この文章に対し、返信すればどうなるのだろうか？

好奇心が実を支配していく。カーソルがグルグルと画面を所狭しとまわり始めた。

実の口から、絞り出すような、どこか咳いたような声が漏れる。

「返信……、してみようかな……」

これは[冗談だ]。何かの[冗談に決まっている]。絶対に何も起こらない。

大丈夫、大丈夫、大丈夫、大丈夫、大丈夫、大丈夫、……。
心の中でそう念じながら、恐々と文章を打ち始める。
もしかしたら……、いやそんなことは、でも……。

あなたは誰ですか？

実はたつたそれだけを書くのに、たっぷりと5分以上をかけた。戸惑いと決意が心の中でシーソーのように揺れ動く。キーボードを叩く指が僅かに震え、目的の文字を正確に打ち抜くことも出来ない。

やつと文章を打つたとしても、それを送信するためにはEnterキーを押すのが躊躇われる。

それらは全て、この後に起じる事象が予想できないからである。これらが全てただの悪戯ならまだいい。

けれどそうでなかつたら？

何かの悪意が込められていたとしたら？

恐怖は人間を魅了する。魅了されれば、その先にある真実を知るうと思つ。

その真実を知るためにには対価が求められる。その対価は自分に払いきれるものだらうか？

「いや。やつぱりただの悪戯さ……」

自分に言い聞かせるその言葉は、どこか弱々しい。緊張からか僅かに息も荒い。

実はEnterキーを、己の臆病さを振り切るように叩き押した。

何事もなくメールは送信される。

クルリと周囲を見渡す。なんの変化もない。

当然だ。メールを送つただけで変化などあるわけがない。何かがあるとしても、そんなのは映画の中だけの話に決まっている。

自然と笑いがこみあげてきた。ゲラゲラと笑う声が部屋中に響く。

たったこれだけの文章を書くのに、えらい気疲れしたような気がする。

何事もないと分かると、自分のバカさ加減に呆れ返つてしまう。メールを送信するとき真剣に悩んでいたが、なぜそれほどまでに悩む必要があつたのか。

その緊張が途切れたのか、それとも何かが起こるという期待に対し、あまりにもあっけなくメールが送信されたことに対する反動からか、実の笑はしばらく途絶えることはなかつた。

ようやく自己の笑いの奔流から解放された実は、椅子の背凭れに体重をあずけて、大きく伸びをした。

ゾワリ

その時、実の背後を何かが通る……、いや、通つたような気がした。

項の辺りを何かがぬるりと触る。

背中に悪寒が走つた。

素早く後ろを振り向くが、そこにはいつもの部屋の扉があるだけで何が存在するわけではなかつた。

いつも見慣れた自分の部屋が、どこか見知らぬ部屋のように感じられた。

メール 第壱話（後書き）

なんか色々と使い方がまだわかっていない……。

メール 第3話（前書き）

今回は少し文章が短いです。

メール 第三話

ななつ……

メール

第三話

作・じとぶきはじめ

君島静奈の口が止まった。すすっと静奈の顔が窓の方へと吸い寄せられるように動く。

外はいつの間にか、大粒の雨が降り出していた。

勢いのついた雨粒が窓ガラスを叩いていく。窓に叩きつけられた雨水は、いくつもの川を作り窓を滴り落ちていった。

突如口を閉ざした静奈の顔を、青井優は訝しむようにして覗き込む。

静奈の瞳はどこか冷徹で、感情を持たない人形の瞳のように見えた。

「君島さん……」心配になつた優が、静奈に声を掛けて肩に触れようとしたその時、突然雨音以外何の音もしないこの教室に、甲高いメールの着信音が鳴り響いた。

びっくりした優は手を引込め、一歩後退する。その時足を絡めたのか、縋れるようにして椅子に倒れ込んだ。

静奈は落ち着きのない優を黙つて見つめ、それから鞄の中にしまった携帯を取り出した。

唇の端が僅かに持ち上がりつつに見える。
自分の醜態を見て笑っているのだろうか？　だとしたらなんとなく気分が悪い。

優は静奈を睨みつけると、再び椅子に座りなおした。

「お兄さんからのメール？」

尋ねる優の言葉には、微量の不機嫌さが含まれている。
静奈が優の顔をチラリと見るが、何も答えることはない。
優がもう一度訪ねる。

「お兄さんから？」

静奈は携帯から視線を外し、優をじっと見つめる。
見つめられた優はなんとなく居心地の悪さを感じ、静奈から視線を逸らした。

「お兄ちゃんからじゃないわ」

そう言つた静奈の言葉は、疑念を誘つのに十分である。
それに先ほど『家族以外の者からは連絡はない』と言つていたような気がするのだが……。

「じゃあ、誰？」

静奈の言葉は優の疑念、もしくは好奇心を誘うのに十分であった。
静奈はじつと優の瞳を見つめ、小さく溜息をついた。

「この学校の、誰かから……」

雨音だけがやけにひるむすべく、この静かな教室内に鳴り響いている。

顔色の悪さは否めない。

昨日の夜、差出人不明の相手へメールを返信し、その結果を待つ
ている状況では、授業の内容よりもそちらの方が気になってしまふ。
なんとも不気味で意味不明なメール。それに対して返信してしま
つたといつことが、今更になって後悔される。
自分自身の愚かさを呪うが、その先にある好奇心を抑えきれない
というのも、人間としてのサガかもしれない。
やつてしまつたことをとやかく言つても仕方がない。やつを開き直
るが、それでも後悔することしきりである。
何度もかの溜息が、自然と大きく洩れた。

「おー、神田

困惑した表情で声のした方を見るとそこには、普段は柔軟な表情をした男性が、今では眉を逆立てていた。

辺りを見渡せば生徒たちが自分を見ている。中には失笑している生徒も存在した。

状況が把握できた。今は授業中で、目の前にいるのは先生だ。

名前は栗原輝和。くりはらてるかず 中肉中背で容姿には柔軟な印象がある。男女ともに生徒に人気があり、信頼の篤い先生だった。

実は慌てて場を取り繕おうとしたが、すでに遅かった。視界の向こうで田所誠がほくそ笑みながら手を振っているのが見えた。

「俺の授業がそんなに退屈か？」

「あ、いえ……」

反射的に起立する。起立したはいいが、咄嗟のことで言い訳が思いつかない。

目を伏せてなんとかその場をやり過ごす。人気のある先生だけに、敵に回した後が怖い。だからとにかく今は耐える。

少しだけ上目遣いに相手の表情を窺う。窺つた相手の表情は、逆立てていた眉を普段の位置に戻し、どこか呆れた表情に戻っていた。どうにかやり過ごせたようである。

「まあ、暇だつたら寝ても構わないけどな、けれど他人の邪魔だけはするな」

「……すこません」

嫌味を含ませた言葉は、実を惨めにする。
それもこれもあのメールのせいだ。メールの送信者に対し、妙な怒りが込み上げてきた。

帰り道、誠が色々と話しかけていたが、それをうわの空で聞き流し、気付けばいつの間にか家に帰っていた。

先日から降り出した雨は今日になつても降り止まず、そのせいが家の中がどこか陰鬱な感じがする。

妙に薄暗く、それに息苦しい。何か圧迫されるような感じがある。別に普段と変わったところはなく、雰囲気だけが普段のそれとは違う。

おそらくこの雨と、先日のメールの件 もつとも自分の送ったメールの件かもしれないが が原因だとは思うのだが、それでもこの感覚に妙な違和感を感じずにはいられない。

どこか薄暗い廊下を歩いていく。

ピタリ

実の背後でなにか、裸足で歩くような、もしくは水が滴り落ちるような、どちらともいえない音が聞こえた。

振り返つてみるが何もない。念のため玄関先まで戻つて調べるが、やはり異常はなかつた。

精神が過敏になつてゐるのだろう。玄関の鍵をかけ、一つ深呼吸した。

実の平穏で退屈なひと時が、ゆっくり、ゆっくりと過ぎていった。夕食と呼ぶには少々遅い時間に食事を摂り、気付けば9時を回っていた。

とくに見たい番組も存在せず、いつもの通りパソコンを立ち上げる。

妙に胸の鼓動が早鐘をうつ。立ち上がっててくるパソコンの画面が妙に遅く感じられ、それがどこかまどろっこしく感じた。

飲み込む生睡が妙に固い。これが固睡を飲み込むということか、などとそんな事を考える。

画面が立ち上ると同時に、いつもの軽妙なイントロが流れてきた。画面が完全に立ち上がったのを確認すると、すぐにメールの確認作業に入る。

受信しているメールは3件。うち2件は広告メール。最後の1件はやはり学校からのものであった。

時間はきつかり19：25。いつもの時間である。

(やつぱりきたか)

予想していたことであるが、それが当たったという喜びは全くなく、薄気味の悪さが心のどこにある。

実は震える手でマウスを動かし、ゆっくりとクリックする。メール画面が展開された。そして内容を確認する。実の瞳が大きく見開かれた。

「 優です

「ちよっとー」

優が立ち上がり、静奈の言葉を遮った。

静奈は突然の優の言葉にビックリした様子も見せず、立ち上がりて憤慨している優を見つめた。

優の顔には明らかに不愉快な表情がくっきりと浮かび上がつており、しかもそれを隠そうとしている。

「いくら作り話だって言つてもねえ、あたしの名前を出す必要性なんてこれっぽっちも無いでしょうが！

それとも何？ 君島さんつてものすごく嫌な人？ あたしをからかってるの？ それがそんなに楽しいの？」

優が本気で怒っていた。最後の方は多少演技がかっているが、不快であり、怒っているのも事実だろう。

感情のままに喚き散らす優の言葉が、静奈の鼓膜を苛立たしげに震わせていく。

静奈の綺麗な顔に、眉間の皺が刻まれる。神経質そうな声で優を宥める。

「分かつたから静かにして。話を止めて帰るわよ

「じゃあ、あたしの名前を出すないでー、じつせ作り話なんだから」

優の声のトーンが下がる。興奮していたことに気付いて、自制しているのだろう。

ただ声は依然不機嫌なままである。しかし静奈はそれを気にした様子もない。

「…………そりや」

静奈が静かに答えた。

「えっ！？」

ソッポを向いて椅子に座りなおした優は、一体何のことか分からず、再び視線を静奈に向け、彼女の白い顔をマジマジと見つめた。薄暗い教室にその白い顔がくっきりと浮かび上がっている。どうかそれが浮世離れしており、この世のものとは思えない。

優の喉が僅かに上下した。静奈の次の言葉を待つ。

「さう。青井さんの話題の話題は作りますよ」

「あ、ああ」

も「やへせがい。」

「おひさま」

優はどこかホッとしたような、地面に足の着いたような安堵感を得る。

けれど見つめる静奈の表情は、何かを隠している感じがする。それは一体何なのだろうか？

「そう、作り話。けれどね、世の中にある物語の多くは、どこかにその原典となつた事実があるものよ」

「じゃあ、君島さんが話してゐる」の物語も？」

「ふふふ、作り話だけど、嘘ではないわ。まあ、名前の方は別のも
のに差し替えましょう。気が利かなくて」めんなりいね

「うちはこそこそ喚いたりしてゴメン。あ、あと、栗原つてあの栗原の」と？」

静奈は薄く微笑んだまま、優に向かつて小首を傾げてみせた。

「なんかさあ、あたしあの先生苦手でさあ……」

優はそう言って、心底嫌そうにして身震いし、顔を顰めた。

「なにかあったの？」

「ん？ やうこいつんじゃないんだけど、なんとこつか……その……」

優は自分の感性に忠実である。あの栗原はカッコいいし、生徒にも人気がある。

けれどどこか漠然と好きになれない。はつきりいえば嫌いであった。

それをつましく説明する「」とが出来ず、もどかしく感じじる。

「分かったわ。じゃあ、そっちも名前を変えるわね」

「お願い」

静奈の提案に、優はどこか安堵した。
雨はまだ降り続いている。

メール 第3話（後書き）

今回は色々とヒントがあります。

メール 第参話（前書き）

物語中での名前の変更は誤植ではありません。

メール 第参話

ななつ……

メール

第参話

作・ことぶきはじめ

私の名前は工藤彩音くどうあいねです。私は殺されました。私は今学校にいます。ここは暗くて寒い。

殺された人間？ そんなバカな、きっと何かの間違いだ。死んだ人間がこんな文章を書くわけがない。

実は必死に目の前にある文章を否定するが、けれどこの文章を全面的に否定することは出来ずについた。しかしこの文章の存在自体は本物である。ならば、何かメッセージがあるのではないだろうか。思考を切り替える。恐怖して思考を止めるのは愚かなことで、その先にある真実を知ることの方が大切なのではないか。

この文章を書いた人間は、生きているにしろ死んでいるにしろ、自分を見つけてほしいと願つていて。なら、この差出人の意思を尊重することが大切なではないだろうか。

悪戯だとしたらおそらく、自分は絶対に見つからないだろう、と

いう犯人の強い自信がこの文章から窺える。実はそういうたゲームなのではないか？ だとすると実はそのゲームの対戦相手に選ばれただけのことだ。

だとすればこういった行為には腹が立つ。何せこちらのアシモなう、本人の意思とは無関係に一方的にゲームに参加させているのだから。実もこのゲームを無視してもよいのだが、何となく相手を確かめたいという欲求がある。

そしてこれがゲームだとすれば、相手はこちらに對して危害を加える意思は低いといえる。危害を加えて殺しでもしてしまったら、自分の存在や自己顯示欲といったものを第3者へ伝達することが難しくなり、その後警察などの介入により、遊ぶことも難しくなる。ゆえに暴力的な意味合いは少なくなる。もつとも、全く皆無というわけではないので、十分な備えは必要になるのだが。

けれどこれが、考えたくはない話だが、いわゆる死者からのメッセージならどうか。この場合はより自己の安全にかかわってくる。真偽のほどはともかく、送信者は『殺された』と独白している。その上で見つけてほしいと言っている。

推測するまでもないがこの送信者は、殺された後で学校内のどこかに隠された、ということになる。

この場合実は、どこに存在するのか分からぬ犯人に氣を付けなければならぬ、という酷く曖昧な情報に基づいて行動しなければならなくなる。

しかしそれにしても……、

「これってあの『雨の日の通り魔殺人』のことだったりして……」

雨の日の通り魔殺人。いつごろからか忘れたが、何年か前から雨の日に起こる殺人事件。なぜ雨の日なんか分からないが、年に

2～3度は必ず殺人事件が起つた。

同一人物なのか、複数犯の仕業なのか、殺された被害者達にも共通点はなく、目的も犯人像すら見えない殺人事件。ただ一つ、雨の日にそれは起つることだけが共通していた。

この事件に街の住人は、恐怖していた。

けれどここ2年ほどは犯人も大人しく、街の人達もまだ警戒はしているものの、表面上は落ち着いていた。噂では、犯人は死んだとか、すでに警察に捕まつた、などの無責任な噂が流れていた。

実が独語した時、部屋のカーテンが僅かに揺れた。どこからか風が入ってきたのかもしれない。

実は一瞬それに意識がいくが、特に気にすることなくパソコンの画面に入つた。

両手をキーボードの上に添え、何事か打ち込んでいく。

工藤彩音さん、あなたは学校の生徒ですか？　そして今、どこにいるのですか？　あなたを殺したのは誰ですか？

一気にそれだけを書き込んだ。文章の最後でカーソルが点滅している。

一度二度と文章を読み直す。おかしな所はないと思う。すうっと息を吸い込むと、そのまま送信のボタンを押した。昨日ほど緊張はしなかつた。

けれど『殺したのは誰ですか？』という問いかけは如何なものだろ？　悪戯だとしたら特に意味のある言葉とは思えないが、もし事実なら……。

そして工藤彩音という、おそらく学校の女子生徒だと思われる人

物だが、果たしていつたい何者だろうか？ 工藤彩音と名乗る何者が存在するのか、それともこの名前 자체が何かの情報なのだろうか。とにかくこれだけでは情報が少なすぎた。

自分のクラスにも他のクラスにもそういう名前は思い浮かばない。もちろん実が知らないだけという事もあり得る。なにか調べる手立てはないものだろうか？ おそらくそれが、このメールを送信している犯人へと繋がるはずである。もし犯人がいないとしても、何かしらの真実に辿り着けると、実はこの時そう思っていた。

昨日よりも強い違和感、もしくは他者からの視線を感じつつ、実は眠りについた。

雨はまだ降り続いている。天気予報でもここ数日は、雨が降り続くと言っていた。

雨脚も昨日から変わることはない。朝からの陰鬱とした雰囲気も変わることなく、学校でもどこか重く沈んだ空気が漂っているような感じがした。

昨日の夜から続く違和感、もしくは他者からの視線も、この雨のせいかもしれない。とにかく前日からのことと疲れているのも関係しているのだろう。

それに一つ、不可解な事もあった。いつも飄々とした感じを崩すことのない誠が、どこか大人しいのだ。しかも思い詰めたような表情をしている。

こちらが何か尋ねても「ああ」とか「うん」とか、曖昧な感じで返事を返してくれる。まったく他へ意識することがなかつた。

授業が終わり誠の机へ行く。授業が終わったというのに、未だ心ここに在らずだった。

「誠。お前さあ、上藤彩音って知つてゐるか？」

誠が振り向いた。どこか顔色が悪い。
実は怪訝な表情をして尋ねた。

「どうしたんだ？」

「な……なんでもない……」

「いや、お前顔色悪いって」

「本当に向でもないって！」

そう言つた誠の身体が僅かに震えていた。
自分が興奮していることに気付いたのか、誠はその顔をキョロキ
ヨロとさせながら、再び椅子に腰かけた。
青ざめた顔を実に向ける。その表情はどうか無理をしてこるのが
分かつた。

「で、どうした？」

「いや、あの、えっとお……」

「早く言えよー。」

突然の怒鳴り声に、まだ教室に残っていた生徒たちが全員、実達を見た。

実は曖昧に笑ってその場を誤魔化すと、他の生徒たちは自分の作業へと意識を戻した。

実は再び誠を見た。肩が上下している。まだ興奮しているのか、呼吸が荒い。

恐る恐る実は尋ねる。

「あ、あのわ……、工藤彩音って、知ってるか？」

「いや、知らない」

「そつか」

「あ、ああ、それなら先生に聞いたらどうかな？ 何も知らないくても学校の資料とかあるだろ？」

縺れた足の音にたどたどじく、呂律のまわりない口調で話をする。

やや早口になつてこむこと、誠自身気付いていない。

「そ、そつか」

「お、俺も手伝ひよー！」

「あ、う、うん……」

相手の勢いに押され、断ることが出来なかつた。

もつとも断る理由もないのだが、どこか今の誠には危うさがあつた。本人が語ることをしないのであれば、こちらから尋ねることもしない。それが二人の暗黙の了解であつた。

二人は教室を出て、職員室へと向かつた。おそらく教師の誰かに聞けば、何か判るはずである。

職員室に入れば、当然のことく幾人かの教師が自分の机の上で作業を行つていた。

さて、誰に話を聞こつか？ 実がそう考える間もなく声を掛けられた。

「どうした神田？」

声のした方を見れば、荒井直樹 あらいなおき 物語中、栗原輝和の名前が荒井直樹へと変更になりました がそこに居た。

突然声を掛けられ戸惑つが、実は一歩踏み出した。

「あの、学校の生徒とか名前とか分かるもの、ありませんか？」

「そんなもの何に使うんだ？」

「いや、あの……」

「当然のことだが、答えられない」と、せついたものを貸すことは出来ないぞ

「いや、じゃあ工藤彩音という人物を探していくんですね」

「工藤……彩音……」

荒井はクルリと実たちに背を向けた。何事が考えているようでもある。

再び振り向くと、どこか真剣な表情であった。
当然だらうな、生徒が他の生徒を調べようとしてるのだから。

「なんで死んだ生徒を探している?」

「えつ……ー?」

「なんだ、答えられないのか?」

「あつ、その……」

工藤彩音が死んでいる。ならメールの人物はそのことを知っているのだろうか?

簡単に分かつた事実に、実は喜ぶことは出来なかつた。謎とか恐怖とかいつた負の感情が、実の心を覆つていいく。

自分の顔もおそらく、隣にいる誠と同じくじい真っ青になつてゐるだらう。

恐る恐るその真実を語つた教師を見れば、いつもと変わらぬ穏やかな顔を浮かべていた。その顔ですら今は恐ろしく感じられる。

そして荒井の問いかけて、返答に窮した。何と答えていいのだろうか。

その死者の名前を騙る人物から、メールがありました。と言えば、おそらく笑われるだけだろう。

けれど真実は知りたい。ゴクリと唾を飲み込んだ。

「工藤彩音つて人から、メールがありました」

「はあ？」

相手は、何をバカなことを言つてるんだ、といったような表情をしてるだろう。

だろう。といつのは、「」のような事を言つ自分がアホらしく、そのため相手の顔を見て話をすることが出来なかつたからである。

「で？」

「えつ？」

「で、そこつは何と言つてるんだ？」

「私を探してほしい、って……」

「はあ……」

穏やかな顔はどこか呆れたような表情になつていた。バカな事を言つた、とでも言つたがである。

実際実自身もバカな事を言つた、という自覚はある。けれどそ

言わなければ、相手の素性を知ることは出来ないし、手掛かりが途絶えてしまう。

バカな事とは分かつていても、眞実を言つたほうが賢明と判断した。ただそれだけである。当然相手の反応もある程度予想はしていた。この反応は予想の範疇である。

「まあ、あまり下らないことに首を突っ込むな。お前たちも学生なんだから、学業にこそ精を出すべきだろ?」

「は、はあ……」

他の教師の視線を気にしながら、軽く頭を下げる。隣にいる誠も頭を下げるのが見えた。

「とにかくそのメールだが、本当にこの学校から送られているのか?」

「えつ? は、はあ」

「せうか。まったく、誰が学校の公共物を使って、そんな悪戯をしてるんだ!」

荒井が少し不機嫌そうにしているのが分かった。

帰り道、降り止むことのない雨に靴を濡らしながら、実と誠はゆ

つくりと歩いていた。

お互に会話はなく、ただ黙々と歩いている。突然、誠の足が止まつた。

「あ、あ、あのさ、俺さ……」

「ん？」

実も立ち止まり、誠の方へと振り返った。

雨は霧雨となって露をつくり、どことなく視界が悪い。
誠の足元には、霧がかつっていた。

「お、俺、俺さあ……、もしかしたら、殺されるかもしれない……」

「は、はあ？」

口をあんぐりと開けた。相手が何を言つてゐるのか理解できない。
意味の解らないメールを受け取つて、もしかしたら殺されるかも
しれないのは自分かもしれないのに、なぜ誠がそんな事を言つのか。
実が間抜けな顔になるのも仕方がなかつた。

一つ頭を振る。相手の真意を確かめる必要があつた。

「えつとお誠、お前何言つてんの？」

「いや！　あの……、その……」

誠の顔が、どこか恐怖に歪んでいた。

メール 第四話（前書き）

これで終わるはずだったのに……orz
今回は静奈と優は出てきません。

メール 第四話

ななつ……

メール

第四話

作・ことぶきはじめ

傘が地面に落ちた。口ロ口ロと風に煽られ路肩へと転がっていく。霧雨がゆっくりと誠を濡らしていく。けれどそれを気にすることなく、一步、さらに一步と実へと近づいていく。

実はどこか狂気じみた誠に、一步も動くことが出来なかつた。まるで金縛りにあつたような、全身が己の身体でないような感じがする。

気が付けば、顔がくっつくほどの距離に誠の顔があつた。やはり彼の顔は青褪めていた。

突然両肩を力強く掴まれ、そして大きく体を揺らされた。

「な、なあ、どうしたらしい？　俺、俺……！」

「い、痛いって！」

最初はボソリと話していた声が次第に大きくなつていいく。それに比例するように、実の肩を掴む手に力が入つていいく。実は、自分の肩を掴む誠の手を振りほどいた。

バランスを崩した誠は、無防備な状態で地面に投げ飛ばされたかたちとなつた。しかし投げ飛ばされた事にも気付か無いような感じで、誠はその場にへたり込んでしまつた。

実はしばらく呆然とそれを見つめるが、すぐに我に返ると、誠に手を差し伸べた。さすがにこのままでは全身がずぶ濡れになつてしまつ。

誠は差し出された手と、手を差し出した相手の顔を見比べる。それからしつかりとその手を掴んだ。

引き上げられるようにして立ち上がり、泥を払い、落した傘を拾う。少し弱まつたかと思われた雨が、再び勢いを取り戻した。言葉を搔き消すほどの勢いで降り続いた。

「どうしたんだよ、なんか変だぞ？」

実が怪訝な表情で尋ねる。

誠を見れば少し顔色が悪い。少し体が震えているが、雨で濡れたせいだけではないだろう。

唇を震わせながら、誠は口を開いた。

「い、いや、なんでもない……。あれは、何でもなかつたんだ！俺は何も見てないんだ！」

「いや、だから落ち着けって！」

「ハハハ！ そうだよ！ 明日もう一度行つて、確かめてみればいいんだ！ あれは何かの間違いさ！ そつそく、きっと誰かの悪戯さ！」

誠は狂つたかのように笑いだした。

見てはいけないものを見た、と言つたが、果たして何を見たのだらうか。

そのことを問い合わせるが、誠は雨の中をフランフランと彷徨うようにして帰路についたので、声を掛けることは出来なかつた。

その後ろ姿はどこか不吉で、死神でも纏わりついているような感じがあつた。

誠がいつもの角を曲がったのを確認する。それを見送ると、うすら寒いものを感じつつ、実も自分の家へと帰つていった。

深夜にほど近い時間。

こつもの通り家のことを終え、少し遅い時間にパソコンの前に座る。

遅くなつたのには理由がある。どうも誠の様子がおかしいのだが、その理由が今一つはつきりしない。そのことが気になり、集中できなかつたせいである。自分の関わつてゐる事と無関係なのか、それとも別の角度で関わつてゐるのか。それすら判然としないでいる。明日学校で詳しく話を聞く必要があるな。場合によつては警察に相談する必要もあるかもしだれない。このような時期であるため、警察も真剣に話を聞いてくれるはずである。

けれど今は一先ず誠の件は置いておいつ。それよりも例の死者からと思われるメールの件である。

頭の中が少々混乱しているものの、実はいつもの手順でパソコンを立ち上げた。

これもまたいつもの手順でメールを確認する。やはり今日もそのメールはあった。

ある程度慣れたとはいえ、実は不吉な感じを拭いきれずにいた。やや躊躇つてメールを開けた。

実の瞳がギョッと大きく見開かれた。実自身はその画面を見てはいけないと思つていて、

けれど自分の意思とは無関係に、硬直した視線はパソコンの画面に張り付いたまま動こうとせず、そこに書かれた文章は否応なく視界に入つてくる。

私は花壇に埋められた。私を捜して。

さがして

検索して。

あ
f
r
f
s

さちやねがZd

サガシテ

さがして

さがして 捜して

搜して さがそて

検索して

捗して。延々とそれだけが繰られていた。相手の執念、もしくは鬼気迫るものを感じる。

しばらく呆然としてそれを見ていたが、すぐに我に返ると、硬直した身体を何とか動かし、氣味の悪い画面に布を被せた。

背筋に悪寒が走る。恐怖からか、身体が震えていた。

不意に何かの気配を感じた。いつもよりも薄暗く感じられる自分の部屋を見渡すが、誰もいない。当然だ。この部屋には自分しかいないのだから。

顔から血の気が引いていくのが分かった。呼吸も少しづつ荒くなつていく。異様なほどに圧迫感のある気配が実を取り囲んでいるようで、なんとも息苦しい感じがする。

けれどこの部屋には自分以外、何もないことは分かっている。気のせいだとと思う。分かっていても、もう一度辺りを見渡す。が、やはり何もおかしな所はない。

異様な感覚に囚われながら、実は這いつぶして自分のベッドへと潜り込む。それから布団を頭から被る。

布団の中でしっかりと目を瞑る。布団の中で丸くなりながら、部屋の電気も消さずにそのまま朝になるのを待つ。けれど、先ほどのメールがあまりにも衝撃的すぎて、僅かな物音さえ今の実には恐怖であった。

ピチャリ、ピチャリ、ピチャリ……。階下から水滴が滴る音が聞こえる。布団をさらに被り耳を塞が、なぜか否が応でもその音が耳に入ってくる。

さらに強く目を瞑る。膨らむ想像が、さらに得体のしれないもの想像させるのか、実は自分の周りを何かがクルクルと回っているような、そんな錯覚を感じていた。

確認したいといつ好奇心を压殺し、そのまま布団の中で丸くなる。それも束の間で、精神的な疲れからか、いつの間にか実は微睡の中へと落ちていった。

翌朝、雨はまだ降り続いている。前日よりもこわさか雨脚が衰えている。

もしかしたら鬱陶しいまでの雨はもうすぐ終わり、週末ぐらいには久しぶりに陽の光を拝めるかも知れない。

けれどそれにはもう少し時間が必要で、今日明日はまだ、すこし湿り気の多い日となるみたいだった。

実はあまりよく眠れなかつたのか、重たい瞼を擦り、ベッドから這い出してきた。

部屋を見渡すといつの中にかパソコンの電源は切られており、部屋の電気も消えていた。

おそらく遅く帰宅した母親が、部屋の電気を消したのだろう。階下へ降りる。やはり両親の姿はもうそこには無かつた。

朝食を口に放り込みながら、昨日のメールについて考える。

あれは学校の花壇に埋められた。という事なのだろうか、と。もしそうだとしても、それがどこの花壇を指しているのか今一つ判然としない。

それに、その死体を探し出したとして、僕に一体何ができるといったのだろうか。

恐怖からくる好奇心で始めたことであるが、一体この件に、自分が何をするべきなのか。

その死体を見つけたとして、一体何が解決するというのか。実には疑問が多すぎる。そしてその疑問を解決する術を、実自身は持つていなかつた。

いつもの通りに学校の校門を抜け、校舎の玄関口へ向かう。その時校舎の前の花壇が目に入った。昨日のメールが頭を過る。

綺麗な紫陽花が真っ青な花を咲かせている。その隣には赤い紫陽花も咲いている。さらに隣にはチューリップなどの花々も、この雨に濡れる少し肌寒い時期に、花を咲かせていた。

おそらくその先の旧校舎の方にも、使われていない花壇などが存在するだろう。以前見た時、旧校舎の方では真っ赤な花が綺麗に咲いていたのを見たことがあつた。

あれはいつの頃だつたか……。記憶を手繰り寄せようとするが、綺麗だという印象のみが先行し、時期の判別までは出来なかつた。ゆつくりと校舎へ向かう。前日のメールが妙に引っかかり、そこで咲き乱れる青い紫陽花が印象に残つた。

メール 第四話（後書き）

最初からこんなに長いと、後が大変な気がする……。

メール 第五話

ななつ……

メール

第五話

作・ことぶきはじめ

実は教室へと入った。「おはよう」と声を掛ける。幾人かが返事を返した。

自分の席へと着き、そこから教室内をグルリと見渡すが、誠の姿はなかった。

朝の登校中にも姿を現さなかつたから、もしかしたらすでに登校してゐるのかと思ったが、彼の席は依然空席のままであつた。もつとも、いつも手ぶらで登校するため、いるかどうかは本人の姿を確認してからでないと分からぬのだが……。

両腕を机の上に放り投げ、その場につつ伏せになる。クラスメートの声をシャットアウトして、考えを纏める。

誰が送り付けて来たともわからないメール。本当に死者からのメールなのか、それとも生きている誰かの悪戯なのか。

あの氣味の悪い文面を見れば、確かに死者からのメールと思いたくなるかもしね。けれど、生きている人間の嫌がらせではない

のか。

そしてあの文面の意味、あれはやはり……。考えは堂々通りを繰り返す。

人影が実の前を通った気がした。それに気付いて頭を上げる。キヨロキヨロと辺りを見渡せば、いつも席に誠の後姿を発見した。立ち上がり彼の席へと近付き軽く肩を叩く。そして声を掛けた。

「よつー。」

ビクリと誠の肩が震えた。恐る恐るといった感じで振り向く。見知った顔を見て安心したのか、安堵の表情を浮かべた。

「な、なんだよ。ビックリさせんなよ」

「昨日は大丈夫だったのか?」

「あ……、ああ、大丈夫だ。今日、っていうか、さつき確認したからな」

「?」

「い、いや、こいつの話。わ、悪いな心配かけて」

まだ少し顔が青ざめているものの、先日ほど動搖した様子はない。それだけでも安心できるというものだ。けれどまだ謎は残る。

「いつたい何を見たんだ?」

「ん? あ、ああ……」

妙に歯切れが悪い。思春期特有の感性として、ポルノ本やAVなどという話であれば、これみよがしに話を振つてくるはずである。とくにこの田所誠はそういうた人物である。けれどそうでないとということは、何か他のものだらうと想像がつく。それが何であるかは別として……。

「だからいつたい何を見たんだよ?」

「いや、もう忘れてくれ。多分勘違いか何かっていうだけの話だか
うわ」

「はあ?」

昨日あれ程怯えていたのに、多少は引き摺つているものの、平静を装つてゐる。気にするなというほうが無理である。

実の真剣な表情に根負けしたのか、誠は一つ溜息をついた。

「じ、じゅあや、ぬつナビ、俺、変なDVDを見たんだ」

「洋物? それとも裏かよ?」

そういうもののを見て後悔したとは考えにくい。けれど、できれ

ばそちらであつてほしいと思う。

道徳的な問題には目を瞑り、思春期特有の好奇心で済む話なのだから。

「違うって」

誠はあっさりと否定した。

「じゃあ何だよ?」

少し苛立つた様子で尋ねた。妙に要領を得ない話し方であり、それが気に喰わない。

「人殺しの映像……」

二人の空間だけが止まったような気がした。周りではクラスメートが騒いでいるというのに、この一人の間だけは静かな空気が流れていった。

それを打ち破ったのは実の笑い声だった。その笑い声は、周囲の雑音の中へと焼き消されていく。特に一人を奇異に見る視線はない。

「だ、だから話したくなかったんだよ」

「い、い、いや、だつてなあ……」

「真面目に話して損したな。ソラのおまめマジで歎んでたの」

「そ、そ、そんなもんぢ」で見つけたんだよ

笑いで声が引きつったような感じになる。誠はそんな実をジード目で睨み、頬杖を突きソッポを向いた。

「視聴覚室」

ぶつきら棒にそれだけを囁く。

「はあ？」

「いや、ちゅうと内緒でな、モクるの」ことひいて、少し前に職員室で鍵を失敬して、「ペーし」といたんだよ

「お、お前なあ……」

呆れた。誠がタバコを吸うのは知っていたし、それを止めはしなかつた。けれどここまでやっているとは思わなかつた。裏切られたわけではないが、なぜかそんな気がした。

「んなでな、そこで何かおもしれーモンないかなあと思つて物色してたらわ、何枚かのＤＶＤを発見したんだよ」

「何やつてんだよ」

「ラベルの無いのが何枚があつて、それを家に持つて帰つてみたんだけど、まあ何枚かは、何年か前の学園祭とかだつたんだけどさ、最後の一枚がわ、なんかすっげー生々しい殺人ショードつたんだ……」

誠の声が僅かに陰る。そのことを思い出したてか、カチカチと歯の噛み合わさる音が聞こえた。

「それ一昨日のことか？」

「い、いや。一昨日の毎休み。ちよつと、な

「なにがちよつとだ。んなもん自業自得だらう。」

「そう言つなつて。マジで反省してゐじ。じまびく禁煙するわ。ん
でさ」

実は眩暈がするのを感じた。誠のやつていることは些ひも巣同然の行為である。しかも学校の物品を盗み出すとは……。

「 最後の一枚だけラベルが無かつたんよ。んで、なんかちょっと期待するだろ？ 期待して観てみたら、バツツリと人が死ぬシーンだったんだ。あれマジでビビッたぜ」

「 んで、そのDVDどうしたんだよ」

「 昨日の朝、ソッコーで視聴覚室に返しといた。でもさ、スッゲー気になるじゃん？ で、今日の朝、もう一度確認しに行つたら」

「 行つたら？」

呆れた口調で鸚鵡返しに返す。

「 もう無かつた」

「 無かつた？」

怪訝な表情で誠を見た。誠はノホホンと構えているが、事はより重大なのではないだろうか？

もし本当に、そのDVDが事実だとしたら……。

「 綺麗さっぱり。DVD自体無くなつてた。まあ内容は、なんか女子がさ、殺される映画か何かだつたと思つんだよ。青い時計をした女の子でさ。ちょっとリアルだつたなあ。まあ、先生か誰かが、忘れたのを取り戻したんだろう？」

「誠、お前」「

「おーーー。」

声のした方を向く。少し早い時間に、担任教師が教壇に立つていた。

全員が自分の席へと戻つていいく。僅かに尾を引きながら、実も自分が席へと戻つていった。

「花壇に死体？」

夕方、教室内で素つ頓狂な声を上げたのは誠だった。前日までの事を全て忘れたかのように振る舞つている。いや、単純な誠の事だから、本当に忘れているのかもしない。

実は思い切つて事の経緯を話した。夜に送られてくるメールの事、そして昨日のメールの内容の事、を。その話を聞いた誠の反応は、上記のとおりである。

それにしても、今度は実が真剣な表情で相対している。朝とは真逆の光景だ。ようやく余裕の出てきた誠は、話を聞き終わつても、いつもの通りへラへラと笑つている。

「なーんかさあ、ドラマか何かで見た記憶だけさあ、紫陽花つて、死体に反応して、花の色が青色になるんだってさ。」

「青色？」

「そつ。それで犯人がどこに死体を埋めたのかが分かる。とかつて内容」

「それ本当か？」

「土がなんか関係してるとか言ってたけど、なんだつたつけ？」

「…………」

「ん、どうした？」

「いや、学校の玄関先の紫陽花つて、一つだけ青くなかったか？」

「そうだっけ？」

「間違いないつて」

そう言つて実は立ち上がると、そのまま教室を飛び出していった。すでに放課後であるため、走り抜けていく廊下には、人の姿はまばらにしか存在しない。

教師たちも部活や自分の仕事で、玄関先の紫陽花にまでは気を回さないだろう。だから今の時間であれば、少し土を弄るくらいのことは出来るかもしれない。

玄関先にまで辿り着いた。小降りになつた雨に打たれつつ、息を切らせて玄関前の紫陽花を見る。

幾つかの紫陽花が群れをなし、その一つが青い紫陽花を綺麗に咲

かせていた。

「お、おー」

追いついてきた誠が声を掛けた。
気付かぬふりをして、玄関に置いてあつたスコップで土を混ぜ返し始めた。

紫陽花の根を張った土は硬く、数センチ掘り進めるのが精一杯といった感じである。
それでも諦めず、土に穿つ。

「何やつてるのー。」

少し甲高い声が響いた。
雨に打たれつつ振り向けば、そこには黒く長い髪を後ろで束ねた女性が立っていた。

「芥川先生……」

芥川涼香。^{あくたがわすずか}20代後半の教師である。長身で少しあせ過ぎとも思える体躯で、青白い顔色が神経質そうな印象を与えるが、やや甘つたるい声がその印象を微妙なものにしている。
少し顔を傾げ、緑の透明フレームの眼鏡の奥にある大きな瞳で、実を不思議そうに眺めている。

見つめられている一人は、いきなりの事に動転し、間抜けな顔を晒していた。もともと、まだ夕方で、教師たちが学校にいるのは当然で、見つかるのは時間の問題である。

「いや、その……」

実の声が詰まる。咄嗟に応えたのは誠だった。

「僕たち園芸部でして、この紫陽花だけ青いなんて不思議だなあ……、なんて思いまして……」

「も、もしかしたら、死体でも埋まってるのかもと思つて……。あ、ああ、すぐに片付けます」

涼香はさらに怪訝な表情をして、一人を見つめた。その視線に晒され、一人は土を戻していく。

無駄な作業を終えた二人は、苦笑ともいえない微妙な表情で、お互いの顔を見合させる。なんとも気まずい。

しばらく沈黙していると、口ロ口ロと可愛らしい笑い声が聞こえてきた。見れば涼香が、まさにお腹を抱えて笑っていた。

「アツハハハハ！　紫陽花の下に……、死体だつて……、アハハハハ！」

ヒイヒイと苦しそうにして笑っている。呆氣にひられて、再びお互いの顔を見合わせる。

いつもの神経質そうな表情は、どうやら教壇の上だけのものらしい。お互いの瞳がそう物語つていた。

田じりに溜まつた涙を、眼鏡を外して拭いとり、呆れた表情で二人を見つめる。

花壇を荒らした」とを怒るのかと思ったが、存外そういう感じではないらしい。どこかピントが惚けている感じがする。

「いえ、でもね先生。前にテレビでやつてたけど、死体の埋まつて
いる紫陽花つて、色が青色に」

「ああ、確かにそういう話はあるわよ。けれどね、紫陽花の花実際には萼と呼ばれる部分なんだけれどね。その部分の色が変化する理由としては、色々あるの。

まず第一に、マンエシアーランと呼ばれる色素。それに補助色素と呼ばれるものによって色が変化する。それと土のPHね、これも紫陽花の萼の色を決定する要因の一つでしかない。

あとはそうね、花弁に含まれる補助色素によって、いくら酸性土壌であったとしても、遺伝的に青になりにくいものがあつたりするわ。それともう一つ、地中に含まれるアルミニウム含有量も影響するわね。

仮に酸性土壌だとしても、地中に含まれるアルミニウム含有量が

少なかつたら、青色の萼にはならないわ。それに最初は青い紫陽花も、咲き終わりに近づくと赤くなったりするわね。これが紫陽花の色の七変化と呼ばれます。

あなた達の言つている、死体の上に植えられた紫陽花の花の色は青色。つていうのはね、死体の骨に含まれるリンに、紫陽花が反応したものだと思われるわ。

それにあなた達も少し掘つて分かつたと思うけど、そんな小さな花壇に死体を埋めるなんて、すごく至難の業よ。紫陽花は低木で、その近くに掘らなきやいけないんだから。人一人入れようと思つたら、それこそ徹夜覚悟になるわよ

「なるほど」

「それにしても」「

3人は雨を避けるために、玄関先へと場所を移した。シトシトと降り続く雨を眺めて、涼香は話を続けた。

「紫陽花の下に死体があるなんて、何でそんな事を考えたの？」

いつもの神経質そうな表情は消え失せ、その雰囲気とは違つた好奇旺盛な表情が滲み出ている。

この表情から察するに、こちらが本来の彼女なのだろう。なら教壇に立つた時の神経質そうな表情は、緊張のためなのかもしけない。

「こいつがね、なんか変なメールが来て、そこに『この学校の花壇

に死体が埋まつてゐる』なんて書かれてたつて書つたのですよ

「おこ、誠一！」

眉を顰めて抗議する。けれど誠は聞く耳を持たない。
少し話大袈裟に、手振り身振りで話していく。

「なるほどねえ。まあ、それ自体悪戯だと思つわよ。あまつ氣にしないことね」

「はあ……」

真剣に悩んでいただけに、あつせつとひつむかわると拍子が抜け
る。

「ああ、それとね、あそこの紫陽花は園芸部の管轄じゃないからね。
それじゃあね、偽の園芸部員さん」

そう言い残して涼香が立ち去る。けれど数歩歩いたところで立ち止まり、もう一度振り向いた。その顔が心なしか、笑つていいように見える。

「ここの学校つて結構いるから、あなた達気を付けなさいよ。つて言つても、遅いかな？ 特に青い腕時計の女の子には気を付けな

「そこ

視線は実と誠の間を見ている感じである。けれどその場所には何もない。

実達に最後の言葉は聞こえなかつた。

二人と別れた涼香が、廊下を歩いていく。

「先生」

後ろから声を掛けられた。ビックリして振り返る。涼香は、いきなり、という行為に物凄く弱い。だから今回も緊張の面持ちで相手を見た。それはいつも教壇に立っている時の厳しい表情であった。緊張するところのような表情になる。が、相手を見た途端に、その表情は破顔した。

「あら、どうしたの？」

メール 第陸話（前書き）

これにてメール編終了です。

メール 第陸話

ななつ……

メール

第陸話

作・ことぶきはじめ

無駄骨、徒労、空振り、骨折り損……。それらが両足の枷となつているかのようで、彼らの帰る道のりの足取りは重たかつた。

花壇の土を掘り返すという、それだけでも十分に重労働の作業を終えたのに、それが無駄だと分かり、さらにはあのメールが悪戯かもしれないと分かつたら、誰でも足取りが重くなり、両肩が下がるだろう。

二人とも徒労からか、口も重くなり、何一つ言葉を発しようとはしない。無言のまま気まずい時間が過ぎようとしていた。

「なあ」

その沈黙を打ち破ったのは実だった。何となく空を見上げた。

先ほどまで降っていた雨は止んでいたが、空にはまだ雨雲が滞在している。まだいつ降り出してもおかしくない、そんな不安定さがある。

「やつぱりあのメールって、悪戯かなあ？」

「はあ、相手は『捗してくれ』って言つてるんだろ？　なら何か意味はあるわ」

「そうかなあ？」

「それに、学校の花壇といつただけで、どこかは言つてないだろ？　あそこは候補の一つだったってだけの話わ」

「まあ、なあ……」

今までの沈黙が嘘のようで、澁みなく話を始めた。

実は実感していた。涼香の言葉で、どこかあのメールに対する執着が薄くなつたような気がする。実際、すでにどうでもよくなり始めていた。

これによつて何かが起つるといつ多少の期待があつたものの、それらがすべて空振りに終わつてしまつたのだから。

ようするに自分は退屈していたのだ。その退屈から抜け出したくて、あのメールの相手をしていたに過ぎない。そんな曖昧な動機では、興味が薄くなるのは当然だった。

もしかしたらあの不思議なメールも、今日からはもう来ないかもしない。なんとなくそんな気がする。

誠が何かを話しているが、それが右から左へと流れていき、頭の

隅にも残らない。なんとなく生返事を返していた。

「まあでも、不思議な事が起こうつたってこいつことは事実じゃね？」

「うん」

「たつたそれだけの事なんだよ。無駄に長い人生で、どうでもいいことが起こうつた。それこそ人生に影響なんてないような、な」

無駄に饒舌である。先日の事を綺麗さっぱり忘れ去つていい。いや、昨日のこととは言葉通り、もつじうでもいいことになつていいのだろう。

着崩した制服のポケットに手を突つ込み、フラフラと歩いている。その顔に、全く締りがない。

その姿を見て思う。誠は綺麗さっぱり忘れることが出来るのだろう、と。良くも悪くもそれが彼の特徴なのだ。過去を引き摺ることがない。常に前だけを向いているわけでもないが、とりあえず現状さえよければそれでいいのだ。

けれど実は違う。メールの事に対して執着が薄くなつていて。それは事実だ。けれど綺麗さっぱり忘れることも出来ない。どこか霧の中に迷い込んで、抜け出すことを諦めてしまつたような、そんな感じがする。

なんとなくそれが敗北感というものに似ており、自分を納得させることが出来ない。けれどもう一度あのメールを調べる気力もない。結局は中途半端なのだ。

気付けば誠の姿はなかつた。どこで別れたのか覚えていない。おそらくいつももの場所で別れたのだろう。いつの間にか自分の家へと帰つてきていた。

夜八時、神田家の台所。

シンクの前で洗い物をしている。テレビから流れる声をBGM替わりに、なんとなく寂しさを紛らわせている。

ふと顔を上げた。目の前には曇りガラスの窓が備え付けられている。雨が降っているため、現在は閉ざしている。

何か強い視線を感じた。誰かに見られているような気がする。思い切って窓を開ける。窓の外は道に面しており右手前に外灯があり、その灯りが洩れ入ってくる。

じつと闇の中に集中する。しばらくすると闇が僅かに揺れたような気がした。さらに目を凝らすが何もない。動いたと思ったのは気のせい……。実はそっと窓を閉じた。

再び残りの洗い物に着手するが、また強い視線を感じる。まるで監視されているような、そんな感じがする。

それは昨日までは感じなかつた。感覚的なものなので断定までは出来ないが、間違いないと思う。

けれど氣のせいと言われば、氣のせいなのかもしれない。なにせ外には誰もいなかつたのだから……。

ブルリと身を震わせた。やはり何も終わってはないのではないか。むしろ危険が迫っているのではないか。

そういうえ……、

「芥川先生、なんか言つてたな……、なんだつたっけ？」

去り際に女教師が何か言つていたような気がする。薄ら笑いを浮かべて。あの表情は全てを見透かしているような、そんな感じがした。

彼女の薄ら笑いを浮かべた口元が、どう動いたのか、思い返してみる。

『…………よ。…………か……な』

ガチャ！

玄関の方から音が聞こえた。思考に集中していたので、意外と大きい玄関のドアノブの音にビックリし、皿を落としてしまった。

「ただいまー」
「ただいまー」

玄関先から男女の声が聞こえてきた。聞き知った声にホッと胸を撫で下ろす。帰ってきたのは両親だった。

「おかえり」

両親がキッチンに顔を出した。久しぶりに顔を合わせたような気がする。

考えていたことは取りあえず置いておく。必要な時に思い出せばいいだろ？。

「やめつ！」

母親が悲鳴を上げた。実は何か分からず、ボケつと母親の顔を見る。

「実、それ……」

母親の指差す先を見る。「ああ」母親がビックリする理由を納得した。

床に散らばつた割れた皿を見てびっくりしたのだ。急いでそれをかき集める。母親も一緒にそれを拾い集める。

実は顔を上げた。先ほどから感じていた視線は、今はもう感じない。やはり何かの間違いなのだろう。少しだけ気分が軽くなる。父親はすでに背広を脱ぎ捨て、それを眺めながら晩酌を始めていた。

「そういうえば、最近不審人物が多いらしいな

「はあ？」

何を言い出すのかと思えば、そんなことか。普段から家を空ける癖に何をいまさう。

別に両親との仲が特別悪いわけではない。ただなんとなく一緒にいたくない、ただそれだけのことだ。

あれこれ干渉されるのはあまり好きではないし、仕事で顔を合わせないことが当たり前となっているから、今更何か言つても意味がないだろうに……。

それでも久しぶりに、チラリと顔だけでも見れて、少しほっとしたのも事実だ。

片づけを終え、台所で手を洗う。すでに晩御飯を食べ終えているので、そのまま2階へと上がつていった。

父親が何か言つているが、それを聞き流して自分の部屋へと戻つていった。

両親の帰宅があったので、かなり早い時間に自分のパソコンの前に座ることが出来た。

まるで決められた行動のように、パソコンを立ち上げた。そしてメールの展開。やはり今日もあのメールが来ているだろうか。すぐにその答えが分かる。メールは……、

あつた。

すぐに広告メールを削除し、残った学校からのメールを展開した。意味不明の文章が飛び込んでくる。その意味を理解すれば、妙に気味の悪い文章だった。

2
3
:
5
9

死
亡

たったそれだけの文章だった。

相手にインパクトを与えるのに十分な文章である。それだけに言葉が無かつた。自分の死亡宣告を受けるとは誰も思わないのだから。実は一つ頭を振る。すべての悪い予感を追い払うかのようにして。

（悪戯だ！ 何かの悪戯に決まっている！ バカバカしい、こんなメールを送つて喜んでいる奴がいるんだ！）

必死にそれを願う。大体、昨日は搜してくれと言つてきた人間が、なぜその相手に死亡宣告する必要がある？ 意味が分からない。これは悪戯なんだ、だから気にする必要はない。不愉快さと不気味さが織り交ぜになる。

（だいたい、こんなのを信用するバカな奴はいるものか！　だから
気にする必要はないのさ）

吐く息は荒い。爪を立てて髪を搔き亂る。
けれども、どうにも落ち着かない。

ドクン

まだ。また強い視線を感じる。立ち上がり、窓を開けて外を見る。

闇はスッポリと街を覆いつくし、分厚い雲のせいもあって、闇が濃い。その中にポツリと浮かび上がる外灯の光は、どこか儚げである。

その外灯の付近の闇が、ゆっくりと動いた気がする。目を凝らして確認するが、闇はすでに元の闇に戻っていた。しばらく眺めていたが、闇が動くことはない。

（連日メールの件で振り回されて、きっと疲れているんだ。そうだ、きっとそうだ。今日はすぐに休もう）

パソコンを切り、布団へと潜り込む。いつもであればまだ起きている時間ではあるが、今は静かに休むことにした。
ゆっくりと、睡魔が実を覆つていった。

いきなり何かの刺激が実を襲つた。

驚いてベッドから跳ね起きる。その途端、得体のしれない何かが、実の体内へと侵入を試みた。

それを吐き出そうと、いや、身体が自然に防御反応を起こしたのか、咳をしてそれを体外へと押し出そうとする。けれどそれは次から次へと実の中へと侵入を試みた。

目が開けられない。開けることが出来ない。開ければその刺激が、眼球を壊そうとする。

状況がつかめない。パニックである。視界はぼやけ、息をすることも出来ない。

必死になつて両親の名前を叫ぶが、声も掠れて出す事すら至難の業である。両親は一階で寝ているから、もしかしたら異変を察して逃げているかもしれない。

視覚も聴覚も遮られ、状況が分からぬ。それでも左腕で口元を抑え、侵入しようとする何かを遮る。必死に手を伸ばし、部屋の外へ逃げようとする。

ようやく部屋のドアノブに手が届いた。それを押し開けようとする。

しかし手に握った感触は、とても、とても熱かつた。ドアノブを握った手は焼け爛れ、その痛みに蹲る。

ようやく理解した。今、火事が起こつているのだ、と。それに気が付けば、異様な熱さが自分を覆つっている事にも、ようやく気付く。窓から外へ逃げようか？ カーテンを広げて見れば、窓の外も炎に囲まれていた。少しづつ、道に人が集まり始めている。その中に、なんとなく見知った顔があつたような気がする。

炎が大蛇のように窓を駆け上つていき、外の景色を遮つた。

フラフラと千鳥足で焼け爛れた手を引き摺り、もう一度扉へと向

かう。握ることは出来ない。自分の着てているトレーナーを脱ぎ、それをドアノブにあてがつて、ドアを開けようとする。

しかし、ドアは開かなかつた。強い力で締め付けられており、実の力では开くことが出来ない。

何度も何度も、ドアを押す。引く。それを繰り返す。両手を使ってガシガシと乱暴にドアを叩きつける。けれど目の前のドアはビクリトもしない。

黒煙が穴という穴から体内へ侵入を試みた。暑さと息苦しさで咽返る。まるで布を喉に詰め込まれたような、そんな感覚だった。

意識も朦朧とする。遠くから誰かが呼ぶ声が聞こえるが、それが誰のものかも判然としない。

自分の部屋の炎が勢いを増していく。もう逃げることは出来なかつた。

薄れゆく意識の中、そして揺らめく炎の中、なぜか涼香の言つた言葉が鮮明に思い出される。

「この学校つて結構いるから、あなた達気を付けなさいよ。……つら一連の、そして今の状況は彼女の手によるものか？」

混濁した意識のなか、それでも何かを必死に探し出そうとする。

そこにきっと答えがあるのだから。

けれど繋ぎとめていた意識はゆっくりと離れていく。

朦朧とする意識の中、ゆっくりと変形していくプラスティックの時計が目に入った。僅かにプラスティックの溶ける異臭が、鼻に付く。倒れた場所からそれを確認すると、その時計は23:59で止まっていた。

(そういうえばあのメール、今日の着信は何時だつたっけ?)

切れ切れになる意識の中でそんな事を考える。すでに起き上がる
ことも出来ない。炎は陽炎を作り上げ、見知った部屋を紅く染め上
げて、見知らぬ部屋へと変貌していく。

その炎の揺らめく見知らぬ部屋で、いつの間にか、少女のものと
思しき両足があるのが見えた。炎に包まれているため、はっきりと
は見えない。

ゆっくりと薄れゆく意識の中、顔を上げて相手お顔を見る。学校
の制服、砕けた顔、滴り落ちる紅い雫、そして……。

「青い……う、で、……だけ……い……」

『前日深夜、×市の住宅街で火事がありました。ここに住む男子
高生、神田実さんは死亡し、両親は無事とのこと。なお火事の原因

は未だつかめておらず、警察と消防は事件事故両方で捜査が進んでいます。では次のニュースです。』

流れのテレビのニュースを、涼香は黙つて見ていた。

メール編 終

メール 第陸話（後書き）

ついでやくメール編が終了しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2179z/>

ななつ.....

2011年12月25日12時50分発行